Chapter 15 : **画面の影たち Part 2**

アブソルは静かに待機列に座り、コントローラーを握る爪がわずかに震えていた。  
fireeeveeにまたしても試合に引きずり込まれたのだ。

対戦相手？巨大なレックウザテーマのレイドボス。金縁つき。ガチャ限定。  
一枚一枚の鱗が千もの財布の金のように輝いていた。

「なぜ…なぜいつもアイツが出てくるんだ…」とアブソルは囁き、瞳孔が縮む。  
画面にはゲーム内バナーがバグったように表示された。

| 新登場！レックウザ ユナイトスキン！ドロップ率0.0002％！700回引いたら確定！

PTSDがフィッシャーの一撃のように襲いかかる。

視界がぼやけた。

鯨たちが見えた。

無限のガチャ引き。

輝くザシアンのスキンを手に入れるために家を失った記憶。

だが、そんな中でも…

彼は背負った。  
いつもそうだった。

一方で…

エーフィは毛を整え、メガネとタイトスカートを直し、巨大な企業タワー「ダークスピン・スタジオ」に足を踏み入れた。  
ここは中毒性の高いガチャゲーム『ポケモン ユナイテッド フロント』の開発元だ。

タワーは紫の金属でできており、ニヤリと笑うゲンガーの形をしている。

「ここは『倫理違反』の叫びだわ…」と彼女はノートを握りしめ呟いた。

彼女の任務？  
夫のブラッキーと医療関係者たちが、これらのゲームが発達中の脳に与える影響を理解する手助けをすること。心理学者かつ図書館司書の彼女の専門は、データや記憶、長期的な行動パターンの分析だ。

彼女はモニターの壁を通り過ぎた。

* 親のカードを使い果たす子供たち。
* 「超レア」スキンを祝うポケモンたち。
* 帽子ばかりで10歳の子が倒れる様子。

その時、扉が勝手に開いた。

中は暗闇。

彼女は一歩踏み入れた。

遅すぎた。

「ようこそ、エーフィさん」と低く粘つく声が響いた。

扉がバタンと閉まった。

ゲンガーが影から姿を現し、目を光らせ、CEO然とした風格で立っている。

「利用規約には返金なし…自由もなしって書いてなかったか？」

影の鎖が彼女の四肢を掴む。  
背後のホログラムに映し出されたのは、

| CEO：ゲンガー。収益：数十億。倫理評価：エラー。

エーフィの目が鋭く光る。

「この化け物…この全ての仕組みの黒幕なのね?!」

ゲンガーは笑った。

「ビジネスは…絶好調だ。」